倫理の空白Ⅴ～責任ある研究活動～

【共同研究編】 あらすじ

●プロローグ 竹澤教授に共同研究のオファー 竹澤　純花(42) 央理大学大学院　農学研究科 食品科学専攻　教授 望月　龍一(55) 延美フーズ　ヘルスケア事業部 本部長(プロジェクト責任者) 長谷部　洋祐(34) 延美フーズ　ヘルスケア事業部 研究員	・央理大学大学院農学研究科教授の竹澤純花は、長年の紫蘇研究を活かした「シソ活」本を出版して話題を集める。 そんな竹澤に食品メーカー　延美フーズのヘルスケア部門の本部長・望月龍一と研究員の長谷部洋祐は竹澤に共同研究を申し込む。赤紫蘇の抗酸化機能をいかした機能性表示食品を開発、発売したいと。 ・竹澤は前向きに引き受ける。
■エピソード１ 『契約書～共同研究を始める前に～』 原　拓海(31) 竹澤研　助教 石川　駿(23) 竹澤研　修士課程１年	・研究室で新規の共同研究について話す竹澤。 ・共同研究には同じ大学の理学研究科教授、松村敬一郎も参加。竹澤研は、有効成分の抽出と合成実験を担当し、代謝実験は理学研究科の松村研究室が担当。製造スケールでの抽出は延美フーズが行うことに。 ・竹澤は助教の原拓海を共同研究の参加研究員に指名。 修士課程1年の石川駿にも手伝いを頼む。 ・自分より年齢もキャリアも上の松村との共同研究に竹澤は不安を覚える。
●契約書の重要性 久野　一誠(50) 央理大学　産学官連携推進室 コーディネーター	・竹澤は央理大学・産学官連携推進室の産学官連携コーディネーター、久野一誠に共同研究の契約面でのサポートを受ける。 ・「共同研究は最初が肝心」と、契約の重要性を説く久野。 『研究の目的』『役割分担』『情報提供』『成果物の取り扱い』等について、しっかり契約書で取り決めておくべきだと。

	竹澤は口では「承知しております」と言いながらも忙しさにかまけて、契約に関しては久野頼りだ。
●共同研究がスタート **松村　敬一郎(62)** 央理大学大学院　理学研究科 化学専攻　教授	・契約が成立し、共同研究がスタート。 ・最初の打ち合わせで、竹澤は松村と顔を合わせるが、どこかぎくしゃく。
■エピソード２ **『役割分担と情報共有』** **●分業とコミュニケーション** **●松村研から送られてきた実験データの数値が異常？** **どうするべきか…** **福田　弥生(38)** 竹澤研　研究補助員	・竹澤は松村に月に1回の定例会を提案するが、松村は必要ないと拒否。必要な情報は共有しつつ、それぞれに責任を持って分業していこうと。竹澤はもやもやしながらもうなずく。 ・食事会も提案するが、海外出張の予定があるという。 ・実験がスタートし、松村研の助教で実験担当者・小山田から代謝実験の数値を記したデータが竹澤研に送られて来た。 だが、ルテオリン類縁体の数値を見た原は疑問を抱く。原は理学部出身で同系統の実験の資料にも目を通していた。小山田から送られてきた数値は、過去の実験のものとはかけ離れていたのだ。 ・それを聞いた研究補助員の福田弥生が過去データの調査に協力。生化学の知見がある福田も代謝実験の数値に疑問を抱く。 ・だが、原は松村からの信頼が厚い小山田が実験を間違うとは思えず竹澤に相談することに。
●竹澤→小山田への確認 **小山田　魁人(38)** 松村研　助教	・原から小山田に確認して欲しいと頼まれ、竹澤は「数値に間違いがないか」と小山田にメールを送る。 出張中の松村にもccでメールを共有。 ・小山田は「間違いはない」と返信する。 ・竹澤は関係の悪化を恐れ、それ以上の追求をやめることに。 何か問題があれば、松村が必ず対処してくれるだろうと。 ・だが、福田は思い切って竹澤に訴える。データが違っているのを放置すれば、後の実験にも影響を及ぼすと。 その言葉を受け止める竹澤。

●共同研究者との対立！？	・竹澤は原とともに松村研に行き、直接小山田と話す。 「実験ノートを見せて欲しい」と竹澤に言われ、小山田は 不機嫌に拒否。「共同研究の相手を信頼して欲しい」と。 ・そこに、松村が入って来た。厳しい表情だ。 ・竹澤は自分が松村を怒らせたのではないかと動揺した。 だが、松村は小山田に実験ノートを持ってくるように指示。 契約書にも書かれているように、共同研究の際には、 「当事者が研究開発に必要ないし有用な情報や資料を互いに開示・提供することが望ましい」と。
●まさかのミスの原因	・松村が確認した結果、エクセルの計算式が違っていたことが判明。そのために、数値が変わってしまったのだ。 ・小山田は竹澤らに謝罪する。「いつも通りに実験したのだから、間違えるはずはないと思い込んでしまった」と。
●「思い込み」から生まれるミスと不適切な行動	・一件落着後、松村は竹澤に小山田に実験を任せっきりにしてしまったことを心から謝罪。 竹澤は自戒をこめて言う。 ・「『きっとこうだ』とか『何々なはずだ』という思いこみは 危険ですね。特に共同研究では」 ・松村は竹澤に立場や年齢にこだわらず、自由な意見交換を していこうと話す。自分も距離をとり過ぎていたと。 うやむやになっていた食事会も行うことに。
●トラブルからの気づき	・竹澤は研究室に戻り、研究メンバーとともに今回のケース から学んだ「伝え方」について話し合う。
●共同研究参加者の追加	・竹澤は久野に、「研究参加者」として新たに福田をメンバーに加えることを報告。本人にも松村研究室にも延美フーズにも事前に承諾を得ていると ・福田も久しぶりに本格的な研究活動に戻ることになり、 いきいきと働く。

■エピソード３ 『秘密保持と成果発表』 ●ついに新商品「赤しそプラス」が完成！	・共同研究は順調に進み、ついに、新製品が誕生した。 その名も、「赤しそプラス」。質の高い製品ができたと望月も長谷部も満足げだ。 ・この共同研究で新発見された新規のルテオリン類縁体は「シソルテ」と名付けられ、央理大学と延美フーズが特許の出願を準備していた。
●発売日数日前 ●石川の研究発表用ポスターに「不適切な」情報が！？ ●情報の共有不足と契約上のルール違反	・石川が研究室独自の研究である「新規テルペノイドの多機能性」についてポスター発表をすることに。 竹澤が指導していたが、「赤しそプラス」の発売が近いこともあり、原に指導を任せる。石川のポスターは完成に近づく。 ・石川はポスターの最終チェックを原に依頼。 そこに、延美フーズの長谷部を連れて竹澤が入ってきた。 竹澤はポスターを見て驚く。以前はなかった『赤シソプラス』のサンプル写真が入っていたのだ。写真には、新たな有効成分「シソルテ配合」の文字も含まれていた。 それを見た長谷部も表情をこわばらせる。 ・石川は「赤しそプラス」を宣伝するつもりで貼ったと語る。 だが、特許に関わるシソルテの発表は発売日に行われ、それまで秘匿することで竹澤も長谷部も合意していた。また、延美フーズの社内事情で発売が石川の発表日以降に延期されていたが、竹澤も原もそれを石川に伝えていなかった。 知らなかったとはいえ石川が勝手にポスター発表で「シソルテ」の情報を出すのは、共同研究上ルール違反だ。 石川は謝罪し、大きなショックを受ける。 竹澤は発売日の延期や契約上のルールについて石川に詳しく説明していなかった自分の責任だと長谷部に謝罪。
●契約書を交わす意味	・久野と松村に一連の事情を報告する竹澤。 ・久野は自分が契約についてうるさく言うのは、研究者を守るためでもあると語る。「権利はもちろんですが、それだけじゃなくて研究にかける想いとか、誇りとか、可能性とか…」

	・松村は今回の件が石川のトラウマになってはいけないと、 心配する。竹澤も同感だ。
●エピローグ **共同研究の成果**	・「赤しそプラス」が発売された。 竹澤は「私たちの共同研究の成果」だと石川に商品を手渡す。 ・竹澤と松村は合同で共同研究の打ち上げをすることに。 松村に労われ、石川は失敗を学びに変えて研究を続けると話す。 原と福田も小山田とわだかまりを超えて歓談。 竹澤と松村は感慨深くその様子を見守るのだった。 （終）